九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

竹内理三教授の入来文書調査への随行とその後

秀村，選三
九州大学 ： 名誉教授

https://doi.org/10.15017/1657348

出版情報：九州文化史研究所紀要. 59, pp.61-73, 2016-03-31. 九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

竹内理三教授の入来文書調査への随行とその後

秀村選三

一

昨年（二〇一五）七月鹿児島県鹿屋市で原口泉氏（鹿児島大学名誉教授・鹿児島県立図書館長）との対談のなかで（東川隆太郎氏司会）、「薩摩おごじょ」の話にふれて、国際的に著名な入来院文書を守られた入来院ヨシさんのことを話したら、その後二、三の方から入来院文書と入来院ヨシ様について訊ねられた。

入来文書は一九二九年にイェール大学教授朝河貫一博士によって The Documents of Iriki（入来文書）が編纂、刊行されており、日本の封建制を比較法制史的に解明するために、薩摩国入来郷にあった入来院文書はじめ入来の諸家の古文書を編纂し、詳しい解説を書いて日本の封建制を西欧の封建制と比較したもので画期的名著として国際的に評価の高いものである。

敗戦後にアメリカへ流れるのではないかと噂されている時期があって、この書の編者がイェール大学の教授であり、国際的に著名な史料の研究として知られているだけにアメリカに流れるかもしれないというのは単なる噂ではない気がしていた。その頃私は九州大学の大学院特別研究生（後期）で薩摩藩の農村、ことに郷村と麓、郷士制度、郷士の農業経営などを研究していて、大隅国高山郷の調査、研究を始めていた頃であった。

当時私は鹿児島県日置村の古川良雄の娘と婚約していたが、当時古川家は日置島津家のお世話をしていたらしい。古川家は日置島津家が祁答院に居た頃から仕えて、秀吉に反抗して切腹させられた島津歳久に殉死し、その後も日置島津家に仕えていた。古川の話では、入来院家と日置島津家とは何度も婚姻関係があり、前述の日置島津家の元祖にあたる歳久とその兄義久・義弘の三人の母も入来院家の女であり、歳久の女は入来院家に嫁いでいるとのこと。古川は台湾総督府に勤め、その後福岡農学校長をしていたが、戦争末期の一九四四年に日置に帰り、戦後は農業と村会議長をしていた。私が入来院文書のことを話して、戦後に多くの名家が社会経済の激変、財産税の支払いなどのため美術品、書画骨董、古文書が売却されて、多くのものがアメリカなど外国に流れているので、入来院文書の噂も本当かも知れないとボヤいたら、日置島津家のおヨシ様が入来院家に嫁がれているので、おヨシ様に古文書を見せて下さるように紹介状を書くから、入来の入来院家を訪ねて、古文書を見せてもらったがよいと言ってくれた。私は当時薩摩藩の近世の独自な古文書は多少読めるようにはなっていたが、中世文書の、それも国際的にも有名な、大量の古文書を見せて頂くなどは、全く恐れ多い気がしたが、アメリカに流れてしまえば今後拝見する機会はないだろう、ともかく見せて頂くことだと思った、なによりも刊行されている『入来文書』には入来の全文書が印刷されているので、それを頼りに見せて頂こうと決心したのであった。

一九四九年三月廿八日早朝、日置の古川家から川内に行き、宮之城線に乗り換えて入来に行った（当時は随分時間がかかるものであった）。紹介状に書かれた所に行ったが、入来郷の旧領主の御宅だから当然立派なお屋敷だろうと思っていたら、案に相違して普通の、むしろ小さなお宅で、ここが入来院家の御宅だろうかと、紹介状の住所を再度確かめて訪問したほどであった。小さいお家であるだけに、入来院文書がアメリカに流れるという噂は根拠のないことではないなと思われた。宛名の御当主であろう入来院重何とか（入来院家らしく重の就いたお名前であったが忘れている）、まだ若い方のようで（おヨシさまの御子息か）、おられないで、この日も翌日もお目にかかることは出来なかった。

おヨシさまは私が差し出した紹介状を読まれると、大変お喜びになり、戦後初めて来てくれたのは貴君だと言われて、入来院文書の各巻を次々に紐ときながら「この文書については、何人もの方からいろいろ言われるけれど、どんなことがあってもこの古文書は私が絶対に守りますよ」と断言されるのには気迫があって感激した。

戦後鹿児島で或る老人が「アメリカに負けたくらいでショボショボするな。薩摩は秀吉に負けた。関ヶ原で敗けた。西南戦争でも敗けた。碁将棋に負けたくらいに思えばよかとじゃ」と意気軒昂なのに驚いたことがあり、また私が海軍にいた時心服していた第三一突撃隊司令飛田大佐が薩摩出身の方で（凡ゆる海戦で沈まなかった駆逐艦の艦長）薩摩の気概を強く感じていた。ずっと後に聴いたが、敗戦後の交渉で「トビタはサムライだ」と米軍の文書に書かれていたそうである。司令は身命を賭して交渉されたのであろう。（奥様は海軍の提督の娘であるのに戦後魚の行商をして子息を七高に通学させられていたという。）私は鹿児島人の気概を思い、「入来文書はアメリカに流れることはない」と思った。

その後大分経ってから「鹿児島では家を守り、主人を守る女性を鹿児島オゴジョと云う」と聞いたとき、すぐ入来院ヨシさまを思った。鹿児島オゴジョというのは、乃木静子夫人あたりから広く言われるようになったそうで、乃木希典大将の夫人は、乃木が明治天皇に殉死した時（称賛と少数の批判があったが）夫とともに殉死した女性であった。

おヨシさまは「宮里淨清さんが文書をよく見られているから、ここに来てもらいましょう」と云って宮里さんを呼んでくださった。私はそれまで薩摩藩の近世の古文書を数年読んではいたが、中世文書については竹内理三先生の古文書学は聴講したが、中世文書を読む訓練はまだまだ不充分で、これほど大量の著名な中世文書を見ることは全く初めてなので、すごく緊張したが、原本をそのまま見せて頂くことに感激し、朝河貫一博士編纂の刊本と首引きで対照しがら大いに中世文書の世界に入ることが出来て、まことに幸いであった。翌日も朝早く起きて日置から入来に行き、刊本と対照しながら入来院文書のほか岡元家文書・寺尾家文書・武光家文書・清色亀鑑等々を拝観さ

せていただいた。日々中世文書を読む訓練で大変幸福な二日であった。

ただ不思議に思ったのは門や名寄等農地や農民に関する幾つもの冊子が博士の刊本には収載されていないのはなぜだろう、史料的価値がないからだろうかと思ったが、近世の薩摩藩の農村を研究している私にとっては、近世と中世との連続乃至比較として考えるのにも手がかりなる文書になるのではないかとの疑問をもった。「朝河博士が刊本に入れられなかったものがありますね」と宮里氏に云ったら、よいことをって云ってくれたと、それらの文書を別にされたので、私はとんでもないことを言ったのではないかと怖れたが、別にしないでにしないで下さいとも遠慮してよく言い出せなかった。

入来院家の墓所に案内されて、苔むした幾つもの石塔が堂々と並ぶ威容に歴史の古さを思い、さすが中世渋谷氏以来の由緒ある家で元寇以来南北朝期各地に戦い、戦国期には島津氏とも相戦った家であり、近世入来郷の領主の、一所衆の家だなと感慨深く、中世末から近世への連続を研究できたらいいだろうなと夢のようなことも思った。

福岡に帰ってから竹内先生にお会いした時に、近世薩摩藩の文書の調査に行き、たまたま入来院家に紹介されましたので、薩摩郡入来町に行き入来の文書を拝観してきましたと申し上げた。そして中世の門や名寄などの冊子は近世史の私は興味深く思いましたが、朝河博士の刊本には一部だけ収載されているだけですと申し上げたが、先生は何ともおっしゃらなかった。

二

その後数年経って私は助教授になっていたが、昭和二九年の秋、竹内先生から朝河博士の入来文書の調査に行くから、桧垣元吉助教授と私についてくるようにと言われた。当時は川添昭二君や瀬野精一郎君など後の錚々たる中

世史のお弟子さんたちがまだ育っていなかったからであろう。また私が鹿児島によく行っていたので交通案内と地方史研究者案内やそれに古文書の写真撮影を始めていたので、その点でもお供させていただくことになったのであろう。私にとっては、まさに千載一遇の機会であった。あとで聞いたところでは東京では入来文書の再調査が問題になっていたらしいが、当時の私はまったく知らないままお供したのであった。

入来温泉の宿に数日間泊まり、毎日宿での古文書の写真撮影であった。当時の日記を見れば何日行ったか分かるが古い日記を探すのが面倒で心覚えのままだが、十二月初旬だったことは確かで。文書は前もって宿に届けられていた。撮影は主に桧垣先生と私があたったが、小型カメラを三脚に載せてピントをあわせながらフィルム一本二百枚位（だったろう）を撮影というプリミティブで非能率であったが、当時は便利で正確だと思っていた。時には先生もされることもあって、上着を脱がれてピントを合わせられているお姿は今も私の脳裏に焼き付いている。史料編纂所の阿部善雄氏も来られていたらしいが、宿は別の、朝河博士が泊まられた宿におられた。竹内先生はお会いになったろうが、私たちの宿に阿部さんは来られなかったのでお会いできないままで残念であった。

この時の調査は泊まっていた宿での写真撮影で、その前後のことはよく記憶していない。ことに入来院家のおヨシさまにはお目にかかった記憶はない。ただ宮里淨清さんが文書をもってこられたことは覚えているが、入来院家の方には全くお目にかからなかった。私はただ竹内先生に頼りきっていたので記憶が薄いのかもしれない。宿屋にこもりっきりでの調査、写真撮影はまったく有難いことで、夕食のあと、先生がくつろいでいられるとき、ことに温泉にのんびり入っていられる時は、まさに好機逸すべからずで、その日見た文書について愚問、珍問を並べ立てたが、旅先であり、ことに温泉にゆっくり浸っていられたからであろう、のんびり私の愚問珍問に答えて下さり、まさに生涯でこれほど幸いな個人ゼミはなかった。桧垣先生は平素から先生に奉仕されるだけの方なので、あまり失礼とも考えずに先生を独占したようなものであった。

調査の最終日の午后、夕暮に近いころ先生が清敷城に登られるのにお供をした。初冬ではあるが南国なので、まだ秋の風景で美しく山の麓の家々やことに遠くの家々が夕靄の中に見えるのには、中世の村に迷いこんだ気がした。この風景はいつまでも思い出す。

翌日は入来からバスで山を越えて加治木に出て図書館の文書を閲覧されたので、私も中世文書を学ぶことが出来た。中世の下人の文書に出会ったのも幸いであった。さらにその翌日は鹿児島で先生は地方史関係の研究会（名前は覚えていないが高校の先生方や地元の方の研究会）で講演をされ、質問に応じられた。

私は原口虎雄先生を先生に御紹介しようと思っていたが。その日は原口先生が出席されてなかったので御紹介できなかった。原口先生は鹿児島県下くまなく史料採訪をされている方なので、県下の中世文書のお話をされてお互い喜ばれるだろうと思っていたが、残念であった。

三

調査後福岡に帰ってからしばらくして、先生から九大の東日西の歴史担当のスタッフに集まってもらい、「中世史研究会」の名で研究会をするから、私にその世話人をするようにとのことであった。この中世史研究会は、九大学内の文学部、教養部の東日西の歴史の教授・助教授、法学部の西洋法制史・農学部の農業史の教授、経済学部の西洋・日本経済史の助教授が集まり、前もって報告者とか報告題名は決めないまま集まり、しばらく雑談しているうちに何となく今日は何々のことを話題にしましょう位で全く雑談の延長でお話を聴き討論するので、前もって準備をしていないだけ、気楽に、本音の話が聴けて大変面白くて啓発された。若くして亡くなられた西洋史の藤原浩さ

んが西欧の封建制社会を簡潔、適格に話された時には頭の良い人だなと感心したり、吉田道也先生が西洋の教会法の観点から日本の寺院法のことを訊ねられて面白く、東洋史の中村治兵衛さんが中国は日本・西欧のように民間に古文書が残っていないので、農村慣行調査をやっているとその内容を話されるなどで、質疑応答もまことに気楽で大変面白くて、おおいに啓発された。中国農村慣行調査はその後岩波から大部の本として出版されたのでなつかしく、ところどころ鈴木さんが話されていたことを読んだ。日野開三郎先生が中世とか封建社会とかいっているが、中国では西洋、日本の考え方とは全く違うとぶち壊しのようなことを云われたが、竹内先生は東日西学界の問題として討論していることが意味あるようにリードされたので各人楽しく、話しやすく、さすが竹内先生と思った。この研究会は先生の学識とお人柄だからこそできたようなものであったが、案外入来温泉での私の愚問珍問に、専門外の者の質疑応答、その反応が面白いと思われたからではないかと、ひそかに思った。

当時私は近世の薩摩藩郷士の下人を研究していたが、薩摩藩は他の藩とは違い種々の面で中世から色濃く連続していることが多いので、近世の下人を研究している者としては、近世から遡って中世の下人から近世への道を学びたいと思い、先生の古文書演習に瀬野精一郎・長洋一・正木喜三郎・後明栄次君たち学生たちとともに参加させていただいた。松浦党の來島（くるしま）文書を原本で、その後東寺百合文書の大山庄の文書を先生のノートから学生がガリ版できって配ってくれたのを読んだ。先生が「なるほど」と云われる所は誤りらしかった。私には読みが当たらないのでのんびりしていたが、後で考えると学生同様に順にあてられていたら、もう少し読めるようになっていたかもしれない。瀬野君たちは愉快な学生で、あった。その後もつき合った。

中世の下人から近世の郷士の下人への道をたどろうと国史の研究室にあった「薩藩旧記雑録」（鹿児島県立図書館本の書写本）や刊本所載の史料や文書のが活字化される以前で、写真などで読み、先生にお尋ねしながら、それなりの努力をしたが、近世史料から遡行する研究の態度には先生は指導しにくいと思われたかもしれない。私なりに

自由に書かせていただき「中世南九州の下人の一考察――薩摩藩郷士の下人からの遡及」をまとめたが、中世から近世への社会構造の変化の中で、その連続、非連続をよく解明できたか否か、もう一度史料をもっと探りたい気持である。

四

先生は研究室にお住まいだったので（あのころは研究室にお住いの方が何人もおられた）、九州文化史研究所にはよく来られて、文化史でだべっている若い私たち院生や学生ともお話されて、質問も気楽にできて幸いであった。当時は文化史の事務室は中型の教室と同じ広さがあり（上は八番教室）、半地階だが光が西の窓から明るく差し込んであたたかった。私たちは火鉢、後ではストーブを囲んで大いにダベり、餅や芋を焼いたりしながら大変楽しかった。その頃ダベったり大法螺ふいていたことを各人その後それぞれ論文にしているようである。学問には教室、研究室だけでなく「気楽にだべりあう場所」も大事だという気がする。もっとも文化史では碁も盛んで各学部の事務員、院生、助手が来て碁会所の感があった。地下室には用務員室・倉庫、学生集会室。暗室などがあって、一階以上の教室、事務室と違うので、なんとなく心やすさがあったから別天地であった。私は当時経済学部はマルクス主義一辺倒の時代で、学問は勿論マル経、社会運動、組合運動にも熱心でなければ睨まれる時代だったので、私や経済史の院生（藤本隆士君、武野要子さん）は「地下に潜る」と称して文化史に逃げこんだが、かえって古文書を読んでダベることができて幸いであった。

昭和二八年の所謂「二八出水」の水害の時、夕暮大学から帰っている時に物凄い雨が降ってきたので、連日連夜の雨の上にこの雨では地下の文化史に水が流れこむと直感して、九大前から反転して文化史に駆けつけたら、一階

から地下に水が流れこんでいて、竹内先生が御一人で書架の最下段の文書や写本を他所に移されていたので、私も加わったが、あとは誰も来なかった。私はこの時以来（口はばったいが）文化史を真に愛しているのは先生と私と思うようになった（文書類の乾燥には相当長い日数を要した）。

先生は九州文化史研究所を大切に育てて下さっていた。文化史の法文経の委員会で文化史の将来について意見を述べ合った時に、文学部の或る方が将来考古学と一緒にやったがよいと言われたら、言下に先生が「考古学とは一緒にやらぬがよい」ときびしい口調で言われた。私は高校生の頃、国史がおかしくなっているのに反発して、（もっとも玉泉大梁教授は実証主義に徹していられた）玉泉館という歴史参考館での歴史研究会では岡崎敬さんらと考古学などをしていたので、多少意外な気がした。しかし先生が昭和三四年九大を去られた後に、考古学やこれと結んだ文学部の全く文書史料とは関係のない教授たちによって、昭和九年以来長沼賢海教授はじめ何人もの教授が苦労されて、やっと教授・助教授・助手、事務2の完全講座になった歴史を無視して、先生御転任後の、文化史を幾つにも分割してポストと研究費の分け前をとりあい（一時は公式名は無くなった時もあった）しかも文書史料には何ら関心も示さず未整理のままであった。現在は名前は九州文化史部門であるが、助教1のみになっている。分割時、助手の楠本美智子さんが理系の博物館への転任を『古文書の無い所には行きません』と断り、辞職を暗示されながら文化史の助手のポストを守って石本家文書目録三冊を完成し、石本家についての論文、史料紹介をされたのはみごとであった。石本家文書は九州文化史部門所蔵で質量を誇る幾つかの家文書の一つで、九州文化史が全国的に誇り得る研究成果を挙げ得る基礎の一つが出来ている。九州大学内外の後継者たちによる共同研究、総合研究の発展を私は心から期待している。

五

入来調査にお供した後に、私なりに考えたことは朝河博士は日本の封建制度のあり方を国際的に紹介するために当然武家と武家の関係に関心を持たれていて、封建領主支配下の農村や農地は中心的課題ではなかったので、関係する農地、農民史料の一部は入れて他は一応除外されたのではないだろうか。また博士ははじめに薩藩旧記雑録によって入来の文書を探られて、その後入来に赴かれて入来院文書その他の家々の文書をご覧になったので、門とか名寄帳などは旧記雑録にあまり収められていないし、当然封建制度を物語る数多い史料に集中されたのではないかと思うようになった。

しかし近世薩摩藩の郷村や農民の支配、とくに門（かど）の源流を知りたくて刊本に収められている土地関係の史料に関心をもち、それ以外にも土地、門に関する文書があり、とくに「一ヶ所」は藩政時代にも居屋敷を一ヶ所といって連続しており、また牟田が多かったことも後年まで湿田が多く、入来での聞き取調査でも「きょうで（兄弟）十人おってん、そいだ（副田）にゃやらぬ　そいだむた（牟田）田で腰かかる）といわれたように副田のような湿田が多かったと思われ、それは私が当時調査していた大隅高山でも湿田が多かったのと相通じるものがあった。しかし大隅では周辺に原野が広く拡っていて、その開発には相当に下人や西目の薩摩や天草から人を入れていること、また藩の直轄支配である高山郷と私領主入来院家支配の入来郷との比較など、東目の大隅高山郷と西目入来郷との対比をしてみたいと思い、入来院分家の文書の一部を借り出して比較研究をするつもりあったが、高山の調査、研究だけに年月日を費やして、入来院家支配の入来郷の研究は出来なかった。そのうちに永原慶二氏らによって入来郷の研究がなされるので、博多駅を通過される時に駅で分家の文書を手渡したが、永原氏は中世の「黒武者の門」を中心に優れた研究成果をあげられ啓発されたのであった。

六

昭和二四年竹内先生が九大に赴任された時、恩師宮本又次先生はすぐ「古文書の大家が来られた。講義を聴講するように」といわれた。やがて一年後位に庶民史料調査委員会が始まった頃、私は院生だったが宮本先生は竹内先生に私の指導をお願いして下さった。昭和二六年宮本先生は阪大に転任、九大を兼任されて、私は留守講座の助教授であったが、社会経済史学会大会直前の二七年二月に近世庶民史料調査の特別調査で大隅の志布志・鹿屋・高山・内之浦・根占の調査をした。九大は森克己・竹内理三教授に秀村、熊本大学原田敏明教授・森田誠一助教授、大分大学安河内助教授、案内人鹿児島二中の村野教諭であった。この時内之浦から高山への帰途、バスの都合で民宿となり、他の先生方は一軒の同じ家に泊られ、竹内先生と私の二人は同じ家に宿り、その夜先生から多くのお話、ことに宇佐の中世の下人のことををうかがい、また私の研究課題の近世の農業と下人のことをお話した。そのためか、翌日高山で宇都宮家の調査で採録していたら竹内先生が「秀村君に良い史料があるよ」と言って表紙に「耕作日記守屋舎人」と書かれた冊子を遠くから投げて下さり、私はこの文書を出発点に守屋家の農業と永代下人、さらに高山郷の研究、西南辺境型領国論となったのである。後にそのことを言ってお礼を申しあげたら大変喜んでくださった。

その年の五月には二七年度社会経済史学会の全国大会を宮本先生が引き受けられていたので、多くの方々の助けを受けたが、竹内先生には古文書の展示で助けて頂いた。九州文化史所蔵の文書の他にも福岡県糸島にある松浦党の中村家文書は、その半分が日田市の日田金広瀬家に移っているので、この際に合わせて展示しようと中村・広瀬両家から文書を借り出して合わせて説明文をお願いし、その他文化史の文書を展示したが、多くの文書に気をくばってくださり展示文書の目録も作っていただいて、やりがいあり好評であった。

当時九大経済学部はマルクス経済学全盛の時代で、唯物史観でない社会経済史学派の宮本門下の私は睨まれなが

らただ耐え忍び、文化史で文書を見ることで慰められ力を与えられて竹内先生の学問、ことに史料編纂への御熱心さにはげまされていた。文化史に九州史料刊行会を置かれて、委員に箭内先生と若い私も加えて頂いたが、先生がガリ版刷の非能率な校正をものともせず史料集の刊行に励まれるのには全く心を打たれた。

一九五四年に関西大学での所謂安良城旋風といわれた太閤検地論争の学会の帰り道で偶然先生と御一緒になり、今から宿を探すと云われるので、私の泊まっていた銀行の寮にお誘いし、夜お話していて、「『平安遺文』もやがて近く完結されるでしょうが、あと何をなさるのですか」とお尋ねしたら、至極当然のように「『鎌倉遺文』をやる積りだ」と云われたので、「何巻位になるでしょか」とお尋ねしたら、三五巻位だろうと云われたので、まったく度胆を抜かれた。実際には四三巻になったのだから大変な史料刊行事業であった。私は先生が史料刊行にかけられる情熱に感動し、全く比較もできないほど小規模ではあるが私なりに史料集の編纂に心を向けるようになったのは、先生の史料集にかけられる情熱に感動したからであった。

七

昭和三四年先生は東大史料編纂所にお帰りになられた。瀬野君たち学生が留任運動をしてお願いしているのは尤もだと思った。先生のご在任の頃には女子学生が殖えてきて、先生が男子学生に女子学生には親切にしてやるように言われたのに、女子学生が反撥して数人が先生に抗議に行き、たまたま「先生も労働者ですよ」と言ったら、先生から「労働者は何を造るのかね」とたづねられて「学生です」と答えたら「あまりいい商品はできないね」と言われてギャフンだったという話を聞いて笑うとともに、私は師弟の間のあたたかいものを感じていた。

史料にお帰りになってからは、私は東京に行くと必ず三、四日兄か姉の家に泊まって史料編纂所に通って「薩藩

旧記雑録」はじめ薩摩藩関係の文書を見せて頂いた。先生は先生の御机の近くに私の坐る場所を作ってくださって、その上お近くの所員の方が私の史料の借り出しや返却をしてくださるので恐縮したが、ご厚意に甘えた。先生が御指示されていたのであろう。兄や姉に頼り、比較的長く東京に行き史料編纂所の薩摩藩関係の史料を見せて頂いたが、あまりにも豊かな史料のために形ある論文にすることはできず残念で、先生には申訳なかったが、しかしこの時学んだものは大きかったと感謝している。

先生には宮本先生が私のご指導をお願いして下さったおかげで長くご指導を仰いだが、わがままで先生のお心に添わぬことも多かったであろうが、先生へ感謝の気持ちは大きく、私なりに先生の不肖の弟子の一人と自分勝手に思っている。人世には運というか、好機というか、思いがけない幸運があるようで、先生が九大に来られた時に、私が復員して京大から転学して宮本先生にめぐりあい、竹内先生にお会いした。さらに宮本先生からお頼みいただいて御指導を受けた喜多野清一先生にもほぼ同じ頃にお会いできて農村社会学の御指導を受けて、村と家や家族を学び、唯物史観のマルクス主義全盛の中で複数主義の社会経済史学の理論と実証を学ぶことができたのは全く先生方のあたたかいご配慮があったからで、神のみ守りであったと生涯感謝している。